

哲学理論の正当化とは何か

氏名 笠木雅史 (Masashi KASAKI)

所属 日本学術振興会・京都大学

近年の哲学方法論における議論の中心は、哲学的理論、主張の正当化に哲学的直観が中心的な役割を果たしているのかという問題にある。この問題の検討には、(1) 哲学理論、主張の正当化に関わるとされる、哲学的直観とは何か、(2) 哲学理論、主張の正当化とはいかなることなのか、という点についての反省が(不可欠ではないにせよ)重要であるにもかかわらず、近年の議論は主に(1)を巡って展開されてきた。この点での反省の欠落は、この問題に関する議論に対し深刻な問題を引き起こしている。

例えば、哲学的な理論、主張が直観によって正当化されると考える論者は、この正当化を認識論で伝統的に考えられてきた認識主体が命題に対して持つ認知的関係、すなわち「認知的な個人的正当化」として捉えていることが多い。そして、彼らは哲学的直観の役割を、知覚、記憶、内観に関する「見え (seeming)」が個人的正当化に対して果たす役割と類比的に説明しようとする。

しかし、哲学的理論の正当化を認知的な個人的正当化と考えることは、幾つかの問題を引き起こす。(a) そもそも誰の正当化が問題となり、誰の直観が問題なのかが不明瞭である、(b) 哲学の実践が基本的に相互の見解の対話という形で行われ、対話的正当化が重視されるため、認知的正当化と対話的正当化の関係をどのように説明するのが問題となる、(c) 哲学的理論の(非)妥当性の厳密さ、普遍性という想定と、その正当化を個人的正当化と捉えることはうまく整合しない、などの問題である。

本発表では、まず、(a) から (c) の問題をより具体的な形で幾つか概観する。次に、哲学的理論、主張の正当化を認知的な個人的正当化として捉えない見解の幾つかを示す。最後に、この内から、哲学的理論、主張の正当化は、その理論、主張を表す命題そのものが持つ認知的な身分(認知的な命題的正当化)であるという見解を擁護する。